

<インタビュー>

西洋中世史研究における2つのパースペクティブ ～池上俊一氏、高山博氏に聞く～

～歴史への関心～

クリオ：まず最初に、先生方が歴史、とりわけ西洋史を志したきっかけをお聞かせください。

池上：西洋史をやろうと決めたのは大学に入ってからですね。それ以前は人文・社会科学全般に興味があって、哲学とか、社会学とか、心理学とか、非常に迷っていましたが、西洋史、特に中世史を選ぶことになったのは、そのなかで何でもできるという気がしたからです。美術史的なことも、哲学的なことも、社会学的なこともね。もともと特に歴史好きだったというわけではなくて、西洋史ならば何でもできるという消極的な理由から、進振りのときに決めてしまいました。

高山：そうすると池上さんは中学・高校時代は歴史に全く関心がなかったんですか。

池上：どちらかというと日本史の方に興味があって、『世界史』はほんとにつまらない教科書だし、授業だしね。高山君はどうだったの。

高山：僕の場合は消去法ですね。あれはやりたくない、これはやりたくないと考えて、結局残ったのが国文学と東洋史と西洋史でした。駒場のときに関心があったのはイスラムでしたが、イスラムだけでなく、いろいろな文化を勉強したいという理由で東洋史と西洋史に絞られてきたんじゃないかと思います。最終的に西洋史に決めたのは、当時西洋史の方が東洋史よりなんとなく明るい感じがあったからです。さっき池上さんが高校時代の世界史はおもしろくなかったとおっしゃってたけれど、僕は中学・高校までは完全な理系だったんですね。得意科目は数学、物理、化学で、地学でした。一番嫌いだったのが歴史、とくに世界史だったんです。世界史はよくわからなかったけれど、他の科目、特に数学や物理にはわかったという快感があるじゃないですか。

クリオ：そうですね、正解が出たときのすっきりとした感じとか・・・

高山：そう。理系の科目には勉強してわかったという喜びを感じることができる。また次から次へと知らないことが出てきてそれを一つずつ知っていく楽しみがある。ところが歴史はそうじゃなかったですね。

クリオ：理系科目というのは偉い学者のやったことを授業のなかで追体験できますが、歴史の場合はそれができない。これが歴史の授業をつまらなくしている一つの原因といえるのではないのでしょうか。何か結果だけをおぼえなさいということで・・・

高山：そうですね。

クリオ：では学校での歴史以外のところで、例えば歴史上の人物に惹かれていたりということはあったんでしょうか。

池上：英雄とかそういうことですか。小学校のころはどういうわけか偉人の伝記を読みなさいといわれたわけで、リンカーンとか野口英世の伝記を読まされて、自分でも好んで読んで、それはそれなりに面白かったですけどね。ただ中学以降になるとそういうものには興味がなくなってしまいました。そのかわりに小説を、日本・ヨーロッパを問わず、読むようになりました。高校のころはいわゆる文学青年で、授業中などもこそこそと読んでいて、授業はあまり聞いていないという、そんな学生でしたね。

クリオ：高山先生はいかがでしたでしょうか。

高山：僕も小学校の頃には伝記をいっぱい読んだ記憶があります。印象に残ったものとは、今はもうかなり忘れていますが、野口英世やエジソン、キュリー夫人、それからノーベル。ノーベルと言えば、ノーベル賞に対する憧れがものすごく強かったですね。科学者の伝記を読んでいたせいかもしれませんし、天文学や天体物理学関係の本を読んでいたせいかもしれません。小さいころ祖父がくれた科学事典の中に星雲や星団の写真が何枚かあったんですが、その美しさに感動したのを今でも覚えています。小学校5年生のときには自分の小遣いをためて平凡社から出た『科学百科事典』の第1巻「宇宙」を買いました。その時から宇宙論とか、当時それをちゃんと理解していたとはとても思えませんが、宇宙が馬の鞍のかたちをしているとか、膨張しているとか収縮しているとか、そういう記事を読みました。そういう記事の中に「ノーベル物理学賞受賞者某によると」という表現が頻繁に出てくるんです。僕は幼心に将来は天体物理学者になって高山説を出すんだと思っていました。ですからノーベル賞を受賞した科学者たちに対して強い憧れがあったんですね。

クリオ：何かスケールの大きな、壮大なものへの憧れというものがあったということなのでしょうか。

高山：ええ、壮大なものへの憧れもあったでしょうね。それに小さい頃は今よりはるかに好奇心が強かったですね。年をとるに連れて好奇心はどんどん弱くなってきていますが、小学校や中学校の頃は知らないことを知るのが楽しくてしょうがなかったですね。家にある本や学校の図書室にある書物は片っ端から読んでました。それが変わったのは受験を意識し始めたころからです。高校に入ってから、僕の場合、突然読書が止まりました。

クリオ：小説を読むのも・・・

高山：そうですね、完全にというわけではありませんが、高校時代に読んだのはほとんど社会科学系の岩波文庫や岩波新書だったと思います。今から考えるとほんとに残念です。

クリオ：そうすると池上先生の文学青年とはだいぶ方向の違う高校時代だったわけですね。

池上：でも僕らには共通する側面があって、スポーツが好きだったんです。学問には体力勝負というところがあって、その体力というのは30歳、40歳になっても根

を詰めて学問にうちこめる基礎的な忍耐力というか、辛抱して継続する力というか、そうしたものが若いころスポーツをやっていたおかげで身についたと思うんです。

クリオ：具体的にはどういうスポーツをなさってたんですか。

池上：小学校の時は水泳とか、サッカー、バスケットボール、陸上競技、なんでもやりましたが、中学・高校はハンドボールを部活動でやりました。

クリオ：高山先生は何かスポーツは・・・

高山：剣道をやりました。でも好きではありませんでした。僕は福岡のある私立中学校の第1期生だったんですが、第1期生ですから先生方がものすごく意気込んでいて、学生に無理なことを要求するわけです。スポーツもできて、勉強もできる学生を育てようという理想があるんですね。剣道部の場合は授業の前に朝稽古、放課後に通常の稽古を毎日やるんですが、夏も冬も汗が乾く前に防具を付けなければならないのでそれがとても嫌でした。確かに根性と体力は付いたでしょうけれどね。

池上：日本の学校の部活動には軍隊的なところがあって、それはとても嫌なんだけど、それでも体力や精神力が少しはついたかもしれない、という気がしてるんですけどね。

クリオ：そうした中・高校時代の苦い経験が現在の先生方の研究生生活にある面で支えているというわけですね。

～学問としての歴史学～

クリオ：では歴史、あるいは『世界史』ではなく、学問としての歴史学をやっていかうと決心されたのはいつ、どのような経緯でのことだったのでしょうか。

池上：もちろん西洋史に進学して、2年か3年で卒業論文を書かなくてはならないわけですね。そうすると就職するか、大学院に進学するか決めなくてはならない。僕の場合はうちの父が学者であることもあって、会社員というのがどういうものか全くわからない世界で、なんとなく学者になるしかないんじゃないかと、これまた消極的な理由なんだけれども、そんな風に思っていました。まあ自分にそういう才能があるのかどうかということはわからないんだけれども、それしかないという気がして歴史研究者になろうと決意したんです。僕が進学する1年か2年前に樺山先生が京都からこちらに来られて、ほぼ僕の進学と重なってるんだけれども、樺山先生というのは、皆さんもよく知ってる通り、該博な知識を持っていて、授業ではその知識のキラメキに唖然とすることがしばしばでした。僕等の卒論に関しては大体ほったらかしているんだけれども、ときどき鋭い指摘をされてギクッとさせられました。樺山先生は卒論の主題を、僕としては突拍子もないものを選んだと思うんだけれども、「そのテーマを選んだのはいいと思う」とおっしゃってくださったんです。そのころですね、卒論を書

き上げて、歴史学をやっけいこうと決めたのは、樺山さんがああいう人でなければどうなっていたかわからない。君の場合はどうだったの。

高山：僕も同じようなところがありますね。僕の場合は学問として歴史学をやっけいこうと思ったのは大学院に入ってからです。それまでは自信がなかったんですね。どうして自信がないかというと、学部の時1学年上に、仙人のような池上さんと河原さん、古代史の島田誠さん、森谷公俊さん、同学年に板橋千明君という、こっちには進みませんでしたけれど、秀才がいたんですよ。この人たちが学者になるのはイメージできるけれども、自分がこの人達に混じって研究をしている姿というのは想像できなかつたんですね。池上さんたちは当時からすごく優秀でしたが、僕はそんなに目立つ学生ではなかつたと思います。研究者としてやっけいける自信がなかったんですね。ただ自分で何かを調べたり、ものを作るのは好きだつたと思います。それで研究者、特に大学の先生になれば幸せな人生が送れるんじゃないかとは思つてました。自信はなかつたけれども、やるだけやってみようと、学部の時に一生懸命勉強しました。僕は第2外国語が中国語だつたので、樺山先生のゼミに入ってフランス語を基礎から勉強しながらフランス語の論文を読んでいました。城戸先生と伊藤先生のゼミもつていましたから、かなり大変だつたと思います。おそらく、自分はこういう道に進みたいという気持ちと自分で勉強する喜びがあつたから頑張れたんでしょね。僕はイスラムとヨーロッパの接点ということで、シチリアを卒論のテーマに選びましたが、この分野での研究が進んでいないだけに、わからないことを知るという喜びを味わうことができたと思います。

さつき池上さんがおっしゃつてたけれど、やっぱり樺山先生との出会いは大きかつたと思います。僕みたいに第2外国語で中国語をとつた者もゼミに入れてくださり、的確なアドバイスを与えてくださいましたからね。なかには厳しいアドバイスもありました。例えば、3年生になつてすぐ、「中世シチリアを勉強するにはどうしたらいいんですか」とたずねたら、突然イタリア語の論文集を持ってこられて、「これを読みなさい」、てね。僕は相談した手前、「読めません」とは言えないから、今度は一生懸命イタリア語の勉強をやつてそれを読んだんです。先生の包容力のある人柄を知つて、この先生とだつたらやっけいけるだろう、と思つたのも幸運でした。そういう意味では城戸先生や東洋史の佐藤次高先生との出会いも僕の人生にとって大きな意味を持っていると思います。僕はそれまで本当に尊敬できる人に出会つていなかったんですね。この出会いがなかつたら、この道に来なかつたんじゃないかなという気がします。

クリオ：ということは先生方はいずれも、これから歴史学をやっけいこうと決心する最も大事な瞬間に樺山先生や城戸先生という存在があつたというわけですね。

池上：今から振り返つてみるとそういうことになるんでしょね。

～卒業論文について～

クリオ：ここで卒業論文についてお聞かせいただきたいのですが、どのような問題関心から出発し、それがどのようなものに仕上がっていったのでしょうか。

池上：僕が西洋史に進学したのが1977年かな、ちょうどル・ゴフが日本に来たのが75年、まだ「新しい歴史学」とか、「アナル」とかは、ほとんど知られていなかったと思うんですね。ごく少数の専門家だけに知られていて、その紹介が少しずつなされようとしていた。紹介をしていたのは歴史家よりはむしろ山口昌男みたいな人類学者であって、これは面白いぞということが言われ始めていたのがその頃です。山口さんは歴史家を挑発したり、批判したりして、一度本郷にもやってきて樺山さんと討論をしたりしたこともありました。そういう時代で、僕自身、フランスの「新しい歴史学」のことをほとんど知らなかった。樺山さんのゼミや講義に出ていると、それまでの日本でやられてきていた西洋中世史関係の研究とは違ったものがあるんじゃないかということには徐々に気づき始めていました。

それで、どうやって卒論のテーマを見つけていったかというところ、そのころは英語とフランス語くらいしかちゃんと読めなかったものですから、雑誌論文をパラパラと何種類も見ている、いくつか面白そうなのをコピーしたりして次々と読んでいくなかで、キリスト教世界における宗教運動に興味をおぼえたのです。どうしてそんな禁欲的な宗教運動なんてものに興味を惹かれたかというところ、これはよくわからないんだけど、僕が当時、高山君がよく知っているように、非常に禁欲的で、厭世的だったということの反映かもしれません。でも彼らとつきあううちに「墮落」して、世俗化していったんだけどね（笑）。そういう世俗化以前の僕の第一の関心は、僕の靈感に響いてきたそういう運動だったわけですね。これはたまたま多くの雑誌論文の中からいくつかの研究論文を見つけただけであって、そういうものがどういう研究史を持ち、どういう歴史的な位置づけをなし得るのかとか、そういうことは最初はまだ全然わかっていなかったわけですね。これが本当にできるかどうか、文献も十分には集まらないんじゃないかと非常に心配していました。東大の先生には文献検索の方法をほとんど教えてくれないという欠点があると思うんですけど、そういう技術的なことはあんまり教えてくれないので、それは独力でやりました。いろんな雑誌を見たり、洋書屋へ行って洋書を眺めたり、洋書の出版目録を見たりして。それで例えば「巡礼」なんていうものに関する研究は、今では翻訳もサンチャゴ巡礼とかに関して多数出てるからそんなに不思議じゃないかもしれないけれど、でもその当時はほとんどなかったですね。できるかどうかわからないけど、盲滅法、まずは巡礼から入って、それでその巡礼だけでは面白そうじゃないんで、同時代のさまざまな民衆的宗教運動を総合的に捉えようというんで、それに関連する「神の平和」運動とか、異端運動とか、教会建設運動とか、十字軍

運動とかですね、そういったものを調べながらその時代の宗教的な雰囲気をつかみたいと思いました。その雰囲気というのをどうやって捉えたらいいかという厳密な方法的自覚は当時なかったけれども、そういうのをうまく捉えられたらという願望があって、それで決めたわけですね。それから4年生を集めての卒論指導の機会があって、こういうのをやりたいと言ったら、樺山さんが「それは良い着眼点だね。フランスでも今流行しつつあるんですよ。」とおっしゃってくれてたんです。その時初めてこういうことをやってもいいんだと安心しました。そうやって、10世紀末から12世紀初めのいわゆるロマネスク建築ができた時代について、僕はそれを「ロマネスク期」と呼んだんだけど、「ロマネスク期における民衆的宗教運動の精神」というタイトルで書いたんです。それから修士に入るときの審査というのは教師にとっては多くの仕事のうちのひとつで、どれくらい力をいれてるかわからないけど、学生にとっては一世一代の大仕事で、その際の教師の発言は一種の神の啓示のようなところがあるわけですね。だからわれわれも教師としてもっとちゃんとしゃべらなければいけないと今になって思うわけなんだけれども、その時にある先生に、「君は文章が長くて下手だね」と言われて、それは非常にズ～ンときたわけ。樺山先生は、君は「ロマネスク期」という概念を使い、「民衆」という概念を使っているけど、それはどういう意味か説明しなさい、と言われて、僕はそれに全然答えられなかったわけです。その二つは今日までずっと響いていて、まああんまり言ったことはないけど、頭に引っかかかっていて、いつかそれに答えてやろうと思って、まあ2、3年後にはその答えを出そうと思って今準備しているところなんですけど。それぐらい重要な・・・

クリオ：「啓示」だったわけですね。

池上：そう。教師というのは時には手を抜いて授業したり、面倒だと思いながら卒論指導したり、あまりにも忙しいのでたまに手を抜くこともあるんです。でも教師の何気ない一言が学生にとってみると非常に重要だということがあるんですよ。

クリオ：では高山先生の方はいかがでしたでしょうか。

高山：僕はさっきも話したようにイスラムに関心がありましたのでね。ヨーロッパとイスラムの接点というか、交渉・交流みたいなことをやってみたいと思ってシチリアに絞ったんです。ところが、いざ勉強を始めようとしても、ほとんど手がかりが無いんです。樺山先生からお借りした本の中にも文化交流や文化接触を扱った論文はありませんでした。それで僕はいろんなところを探し回りました。国会図書館や一橋大学附属図書館などを探し回って、「シチリアのイスラム」といった類いの文字の入った本をいくつか見つけることができました。「文流」というイタリア関係の洋書を扱う本屋さんに行ったら、シチリア関係のカタログのコピーをくれました。こうして少しずつ取っ掛かりを作っていたんです。皆さんもやっているでしょうけれど、シチリアとかアラブとかムス

リムといった言葉の入った文献を探し出し、その本の参考文献目録を見て、他にどういう研究があるのかを調べる。手に入る書物は本屋に片っ端から注文して、手に入らないものはコピーを海外の図書館に注文する。日本で手に入ったものはわずかでした。しかしほとんど卒論には間に合わなくてね。それでいくつか手に入ったものだけで書くしかありませんでした。

フランチェスコ・ガブリエリの論文「シチリアのノルマン人のアラブ政策」を参考にして、イブン・ジュバイルの「旅行記」のシチリアに関する部分を使いました。タイトルは「シチリアにおけるノルマン支配下のムスリム」でした。今から考えると論文としては欠陥だらけのものでしたけれども、当時の僕としては全身全霊を込めて卒論を書いたんです。ところが提出したとたん熱を出して寝込んでしまったんです。それまではたぶん精神力で体がもってたんでしょうが、提出した途端に気が抜けて熱を出したんでしょうね。起き上がれなくなったので友人の松下君に電話して食べ物を買ってきてもらいました。その時僕は、いくら頑張ってもできないことがあるっていうことを悟ったような気がします。僕たちは、頑張りさえすれば今得た結果よりもいい結果を得られるんじゃないかと、自分の能力を過大評価しがちですが、実際には無限に頑張れるわけではないんですね。限界は最初に体にくる。さっきの池上さんの話じゃあないけれど、体力という障害があるんですね、現実には。それ以後、僕は自分の能力に対して余り幻想を抱かなくなったような気がします。時間はこれだけだからこれくらいしかできないと考えるようになったんですね。

大学院に通った後、樺山先生に次のように言われたのを覚えています。「君が書いた論文は卒業論文としては良くできているけれども、この程度の論文では修士論文として受け入れることはできませんよ。君がやっている中世シチリアについては、他に研究している人もほとんどいないし、欧米でも研究が進んでいないから、大変だということは充分承知しています。しかし、だからといって、君の書く修士論文の水準が低くてもいいというわけではありませんから、そのつもりでいて下さい。どのようなテーマの研究であろうと、現在の欧米学界の水準をクリアできるものでないとだめですからね。」と。それ以来、水準の高い論文とはどのような論文なのか、欧米学界の水準をクリアするとはどういうことなのか、どうしたらそのような論文を書くことができるのか、という問題がずっと僕の頭の中にあるんです。これまで、僕なりに水準の高い論文を書こうと一生懸命努力してきたつもりです。さっきの池上さんと同じように僕にとっては大きな言葉だったんです。

～研究室について～

クリオ：こうして卒業論文を作成され、大学院に進学されて、おそらくゼミも同じものを取っていらっしやったのではないかと思うんですけど、まず進学当時の研

研究室の雰囲気についてお聞かせ願えますか。まずスタッフにはどの先生がいらしたのでしょうか。

高山：柴田三千雄先生、成瀬治先生、伊藤貞夫先生、城戸毅先生、樺山紘一先生です。

クリオ：それでどの先生のゼミに出られていたんですか。

池上：駒場の木村尚三郎先生もこちらに来られていたので、中世史の3人の先生方のゼミに出ていました。

高山：僕はずっと池上さんと一緒でした。

池上：研究室の雰囲気というところでは言わせていただくと、僕が本郷の西洋史に来た当初は、中世史の学生はほとんどいなかったんですね。相沢さん一人きりという感じで、古代と近現代の勢力が大きかったわけで、中世はその間に挟まれて、ほとんど人がいないという状況だったんですね。実際研究室に行ってみると、とくに近代の人かな、大学院生の方が偉そうに、偉そうにというのは言葉が悪いんですけど、既に一丁前の学者のような口ぶりで議論していて、なんか研究室に入りづらくて、例えばどんな人がいたかという、もうこちらに戻ってこられたような石井さんとか、助手は福井さんと・・・

高山：前沢さんですね。

池上：そう。その前は松本さんという人で、あと柴野さんとか、青木さんとか、深沢さんとか、そういった、まあ、多士済々と言いますか、議論好きの人が沢山いたわけです。その人たちが非常に学問的な議論を研究室でしょっちゅうやっていて、本当に僕なんか入りづらくてね。それで皮肉を言われたりして、口の悪い石井規衛さんとかね。最近はやっと丸くなったと思うんだけど。とにかくいろいろとキツイ言葉を浴びせかけられて、ちょっと入りにくい雰囲気でした。でも徐々に、これも樺山さんの影響力かもしれないけれど、樺山さんのゼミに属する中世史の人が増えてきて、それで大学院に進む人も増えてきて、中世史をやっても安心して研究室に行ける、そんな風に雰囲気も変わってきたと思うんですけど。

クリオ：確かに、池上先生の後の代は中世史の方が連続していらっしやいますね。

池上：そう、割合ね。

高山：僕らのところに10数人固まっているんですね。学年順に挙げると、相沢隆さんが少し離れていて、僕の1学年上に池上さん、河原温さん、僕と同じ学年に、甚野尚志、藤田朋久、島田勇、1つ下の学年に堀越宏一、藤田（旧姓西川）なち子、3つ下の学年に新井由起夫、有光秀行、鈴木広和とね。

池上：われわれは、近代史の人なんかから羨ましがられるんだけど、皆「仲良しグループ」で、昔はよくスキーに行ったり、海水浴に行ったり、ついでに勉強会をやったりね。よく合宿を一緒にして、勉強しながら遊んでいたんです。そのころ高山君と言っていたのは、みんな仲良しグループはいいけど、将来、樺山先生のような偉い人の下に転がっているドングリの背比べみたいな弟子たちだと言われないうちにしようねと。まあ偉い先生についたのは幸せなんだけど、

小粒な、「その他諸々」になっちゃうのは嫌だな、とね。

高山：あの頃は楽しかったですね。僕らの代は肩身が狭いとも感じていませんでしたね。特に僕たちの学年は数が多くて、学部の際は20数名いました。池上さんの学年より相当多いですね。研究室にドドドって入ってきて、ワーワーやって、さっと帰って行くって感じでしたね。大学院に入った後も、中世史は、相沢、池上、河原といて、僕と甚野で、もう5人ですから、あまり肩身の狭い思いはしてなくて……。演習が終わると必ず喫茶店に寄って、皆でいろんな話をしました。

池上：そうだったよね。城戸先生のゼミの後か。ラテン語が終わって、ときどき城戸先生も参加されてたけど……。

高山：ほとんど毎週喫茶店に寄って、学問的な話だけじゃなく、いろんな話をしましたね。あれは楽しかった。あの頃、僕は池上さんのところへしょっちゅう遊びに行っていました。そういう中から学んだものも多いと思います。書物に関する情報とか、道具類の情報とか、そういうものを先輩たちから相当もらったような気がします。

～ゼミについて～

クリオ：当時の中世史のゼミはどのような形式で、あるいはどのような教材を使っておこなわれていたのですか。

池上：当初、樺山さんは非常にはりきってらして、2、3年以内に出た雑誌論文の中から自分の興味深いものを選んで、それを、一人2週間担当して、1週目はその概要を紹介し、2週目はそれに加えて自分が調べたことをしゃべって、そのあと討論、てことになるんですけど、実際は討論にならなかったですね、あんまり。まあ都市の問題なんかを扱った論文を取り上げたときには、都市をやっている人たちがかなり多かったものですから、そういう人たちの間で議論していたけれども、まあそれ以外の題材を取り上げると発表者がしゃべって、他の人がほんの少ししゃべって、後は樺山さんがまとめてしまい、その有無を言わせぬまとめぶりに対して何も言えないという、まあ非常に勉強にはなったけれども、何も言えない自分が悲しくて、ストレスがたまりましたね。だから、ああいう風に明快に、全知全能のように、まとめられてしまって、そしていつもそれに感動する、ということで終わる。その時はもちろん反論も意見もあまり言えなくて、われわれ大学院生としては情けなかったかもしれないけれど、その時の思い出を記憶に留めておいていつか答えよう、というように……

クリオ：そうすると今かなり蓄積されているというわけなんですね。

池上：まあ、半分くらいは吐き出したけれど（笑）。だから樺山さんの授業はそれなりにいい授業であったと思いますね。活気があったとは言えないかもしれないけれど、ためになって非常に勉強になりました。城戸先生はずっと中世ラテン

語の講読をなさって、僕の場合はローズ・シリーズというのがありますよね、あの中のを年代記をはじめはずっとやっていたんだよね。

クリオ：いつ頃の年代記ですか。

池上：何を読んでいたのかな、セント・オールバンズの年代記じゃなくて・・・。

高山：最後の方は、カンブレの・・・。

池上：あれは、MGHじゃないかな。

高山：そう、あれは覚えているけれども・・・。

池上：何かの修道院の年代記でしたけれども。非常に厳密な講読でしたね。ラテン語を厳密に読んで訳するという訓練はそれが最初で最後でしたね。

高山：過酷な演習だった（笑）。

池上：過酷な演習だったね（笑）。その厳密性というのは歴史研究の修行という点で非常に大切なもので・・・。

高山：城戸先生御自身はお気づきになっておられたかどうかわからないけれど、ほぼ正確に訳した学生に対してだけ「どうもありがとう」とおっしゃり、間違った箇所だけを修正されていたんですね。ところが学生の訳が間違いだらけの時には、何もおっしゃらずに、学生の報告が終わった段階で先生が初めからもう一回訳し直すんです。学生が訳の途中で詰っても、先生は助け船を出してくれません。だから1分でも2分でも・・・

池上：なんか異様な沈黙が支配して、あれもなかなかストレスがたまるといふか、すごく重苦しい。

高山：すごく苦しい授業でしたね。最初の頃は、いつになったら池上さんと同じように「ありがとう」と言ってもらえるのかな、と思っていました。

クリオ：現在では、だいぶ城戸先生も優しくなられたと巷では言われていますけれども、それでもやはり、最終的には自分で、自分の頭で解決させるように、あまり助け船を出しすぎるといふことは取って控えていらっしゃるようで、今でも1・2分の沈黙はあります。

池上：今、城戸先生は何を教えていらっしゃるんですか。

クリオ：僕らが修士に入って最初の2年間は、ジュミエージュのラテン語の史料を読んできました。その後は、アングロ=ノルマンの年代記です。それも今日終わったんですけれども。ちょうど善良議会の記事を読み終わって、ウィクリフの記事に入るところで終わってしまいました。

池上：じゃあラテン語じゃなくてアングロ=ノルマン語を？

クリオ：そうです。

池上：それから木村尚三郎さんも駒場から来られて授業をやられたわけなんだけれども、木村さんは毎年初めにテキストを決められて、それをできれば一冊全部読むという意気込みでした。だからアリエスの『子どもと家族の生活』（邦訳『子供の誕生』）を、まだ日本語訳が出る前だったと思うけど、読んだり、あと・・・

高山：「メナジェ・ド・パリ」。でもあれは全部じゃなかった。

池上：それは僕は出ていなかった。たぶんその頃もう助手をやっていたからだろうね。とにかく1年の最初の授業の時に何冊か木村先生が持って来られて、「この中からどれか好きなものを選んで下さい」と学生に聞いて、それを大体学生に訳させて木村さんが後で要点をもう一回おっしゃって、それでまたいろんなことをしゃべられるという授業で、それも木村先生の独壇場みたいになっちゃうことも多かった。木村先生はいらいらされて「君たち何か意見はないのか」とやんわりと皮肉られることもあったと覚えています。そのころ、われわれがちょっとおとなしすぎたって反省もあるんだけど、木村さんに刃向かえるだけの知識も理論武装もないということであんまりしゃべらなかつたんですね。でも木村さんは1年に2回くらいご自宅というか、赤坂の仕事場のマンションに大学院生をみんな呼んで下さって、フランス料理といいますか、フランスパンや生ハムやパテなどを食べながら、授業をやったり、いろいろと話したりして、それはそれなりに感化されましたね。僕らの教わった3人の先生方は皆それぞれずいぶん違うんですね。それぞれから違った影響を受けたというか、違ったことを学んだといえると思います。

～修士論文について～

クリオ：ここで、大学院に進学され、そのような三者三様の個性を持った先生方のゼミに参加された先生方の興味がどのように移り変わっていき、あるいは変わらずに、修士論文に到ったのか、その経緯をお話しいただきたいんですけれども。

池上：まあ修論というのは、さっき高山君が言われたけれども、卒論のようなものではダメだよというのは先生方から言われたと思いますね。つまりオリジナリティがなければいけないというので、当然原史料、僕の場合はラテン語ですけども、それをかなりたくさん読まないで、単なる研究史の整理やなんかでは済まないものだというのはわかっていました。それで僕は卒論で割合広い民衆の宗教運動をやったので、それと関わりながら、その精神を非常に鋭く体現していた特異な人物たち、つまり隠修士をやってみようと考えたわけです。隠修士というとなすすまぬ誰もやっていないですね。日本では誰一人やっていないし、ヨーロッパでも誰がやっているのかよくわからなくて、それはもう必死に調べましたね。それでまず関連の文献の調査をそれこそ今までの研究生活の中で一番やったと思いますね。

クリオ：文献は日本で見つかりましたか。

池上：いや、さっき彼が言われたように、ほとんど毎日のように外国に手紙を書いたという記憶があるね。だからもう時間がないですよ。修論は2年で書かないといけない。ある程度、どういう文献があるか、どういう史料があるか、調べたり、研究の問題関心が固まってくるのに1年くらいかかるんですから。そ

れから史料を必死に集めるわけです。今の日本だとかなり珍しい史料とか、珍しい雑誌もあって、われわれの時代と比べれば格段に恵まれていると思うんです。かなりあちこちの大学に史料集や雑誌類があるけど、われわれの時にはもっとずっと少なかった。だからほとんど外国から取り寄せるということになって、それでどういう手段があるかということ先輩に聞いたり、自分で試行錯誤してみたりして、フランス、イタリア、ドイツ、イギリス、あらゆる国の図書館に日々手紙を書いて、一刻でも早く手に入るようにね。そういうエネルギーというのはもうなくなってしまいましたけど、それはもう大変なエネルギーで、体力と、情熱にとりつかれたようにならないとできない。まあお金もかかるから経済的な問題ももちろんあったけれどね。僕はその頃、池袋に下宿していて、そこのおばさんが毎日のように何かが届くものだから、一体どうなってるのかしらとびっくりしていました。時々、何か大きなコピーの山や本なんかが届くと、「池上さんまた外国から郵便がきてうれしいわね」なんて、皮肉か本音かどうかわからないけれど、言われたりして、まあ届いてうれしかったんですけど（笑）。まあそういう風にして雑誌論文や史料を集めました。当時、隠修士のまとまった研究というのは、ほとんどなかったですね。最近フランスでも、ダラランという人が隠修士の研究を出したり、あるいは他にも本は出てるし、雑誌論文も出てるけど、その頃はそれこそ何もわからずに、従ってまとめ方もヨーロッパの研究に則ったものというよりもむしろ自分の思い込みというか、その思い込みを発展させてまとめた、といったところですね。

高山：僕の場合も修論は基本的に卒論の延長ですね。但しテーマと史料は変わりました。テーマは「12世紀シチリアにおけるノルマン支配下のムスリム」から「12世紀シチリアにおけるノルマンの財務行政機構」へ、史料はアラビア語に、ギリシャ語、ラテン語のものが加わりました。どういう史料を使って、どういうテーマを選べば、水準の高い議論ができるのか、ということはずっと考えていましたから、それがテーマの選択や史料の収集に影響を与えたかもしれません。史料の収集は順調に進んで、修士の頃には研究室に来る度に届いた史料のコピー折りをしていました。毎日毎日みんなと話しながらコピー折りをしていたんですね。

池上：よくやっていたよね。

高山：ええ、本当によくやっていました。大事なものは何カ所かの図書館にマイクロフィルムやゼロックスを頼みました。こうして集めた文献を読んでいるうちに、財務行政機構の実体がよくわからないということがわかってきたんですね。この問題について様々な研究者が言及しているんだけど、それぞれの見解が異なり矛盾しているんですね。これが修論のテーマになりました。研究者たちの見解を整理した後、史料を徹底的にチェックしました。しかし史料から得た情報を自分の頭の中でまとめることができないんですね。史料を見て、文献を読んで、また史料を見てということはずっと繰り返し、寝ても覚めても風呂に

入っている時もその問題を考え続けました。とりつかれたようになってるわけですよ。2ヶ月くらいはそういう状態が続いたんじゃないかと思います。それで樺山ゼミの報告の前日に、レジユメを作っていたら、突然ひらめいたんですね。財務行政機構の構造はこういう風になっていたんじゃないかな、と。この構造に従うとそれまで説明できなかったいろんなことが説明できたんです。そのときは体が震えました。全身がブルブルと。この新しい発見を翌日の樺山ゼミで報告すると、樺山先生は「なるほどね」とおっしゃってくださったと思います。その後は単純作業でした。結論がありますから、それを論証するために、情報を整理して、論述すればいいわけです。修論が書き上がった時、樺山先生がおっしゃって下さったのは、まず『史学雑誌』投稿用の原稿を日本語でまとめて、それをもとにできるだけ早く英語に直しなさい、ということでした。結局『史学雑誌』に2本の論文を発表し、そのうちの1本を英語にしました。樺山先生のアドバイスで欧米の著名な中世史家数人にこの英文原稿を送りました。すると2週間もしないうちに、十字軍研究の論文集シリーズの編者として知られているK・セットン教授（プリンストン高等研究所）から返事をいただきました。手紙の中で論文が絶賛されており、『スペクルム (*Speculum*)』へ送りなさいという助言も記されていたので、僕は有頂天になって、すぐ『スペクルム』へ原稿を送ったんです。今から考えるとそれが間違いだったんですね。

池上：なんで出してくれなかったの。

高山：結論からいうとこういうことです。『スペクルム』のエディターは、審査員の返事が遅かったからでしょうが、その審査報告を受け取る前に、『スペクルム』には専門的すぎるという理由でリジェクトしたんですね。彼の手紙には、「この論文は学問的には非常に水準の高いものだが、当誌には専門的すぎるのでこのままでは掲載できない。大幅に書き直して再投稿されるか、もっと専門的な雑誌に投稿されてはどうか」と書かれていました。僕はがっかりしてその結果を城戸先生、樺山先生に報告したんですが、城戸先生には「君はなんでセットンの手紙を一緒に添えて送らなかったんだね。」と言われました。またセットンからも「今度送るときには僕の名前に言及するように」と言われました。僕は、セットンがこんなに褒めてくれたんだから誰が読んでも絶対大丈夫だろうと思って、彼の手紙は添えずに論文だけを送っていたんです。それが間違いだったんですね。しかし、リジェクション・レターを受け取ってしばらくした後、エディターからまた手紙が来ました。何だろうと思って封を開けると、審査員から非常に好意的な審査報告が返ってきたので、『ヴィアトール

(*Viator*)』に投稿することを勧める、という内容でした。僕はその時かなり悲観的になっていましたから投稿してもどうせリジェクトされるだけだろうと思って、そのまま放っておきました。すると驚いたことに『ヴィアトール』のエディターから直接手紙が来たんです。「アカデミック・グレイブヴァイン」(「アカデミック・ネットワーク」)で、あなたの優れた論文の噂を聞いたの

で、是非うちに投稿して欲しい、ということでした。それで、その時まで専門家たちから受け取っていたコメントを全部添えて投稿しました。こうして英語の処女論文が『ヴィアトル』に掲載されることになったんです。

～留学について～

クリオ：ここで先生方がそれぞれ留学なさったときの体験についてお話しいただきたいんですけども、簡単にまず留学先などの事実関係と留学の最大の成果についてコメントをいただければと思いますけれど・・・。

池上：僕が留学したのは助手時代なんですけど、助手を3年くらいやりまして、そのころようやく留学ブームが始まりつつあったわけですね。それまでは中世史や古代史にはあまり留学する風潮がなかったんですね。近現代史の人は行っていたと思いますけれど。しかしその頃なんかパタパタと皆行き始めて、相沢さんが・・・、誰が先だったかな。

高山：河原さんが1983～85年、僕が1984年～90年、池上さんが1986～88年ですね。

池上：僕より先だよ。高山君とか相沢さん、河原君とか・・・。僕は最初は特に何が何でも行こうという気はなかったんですけど、みんなが行き始めるとやっぱり行かないといけないという気がしてきて（笑）。で、どこへ行ったらいいかという問題もあったんですけど、一応フランスのを中心にしてやってるんでフランスに行こうということになったんですね。その頃は徐々にいわゆる狭い意味での宗教史からは離れて、もうちょっと広いことを何かやりたいと思って、思い切って「アナル」の牙城というか、中心へ行こうかと考えました。樺山さんにも相談したら、「じゃあ、応募してみたら」というんで、学術振興会の海外特別研究員に、それが若手しか取らない奨学金で、年齢制限が30才未満だったか、30才以下だったかで、僕も割合ギリギリだったんですけど。それで運が良かったのか、1回目ですべて通ってしまいました。助手を休職になって非常に不安でしたが、とにかく行ったんですね。その前に旅行で1回ヨーロッパに行ったことはあったんですが、住んだことなんかはもちろんないんで、何もわからずに行って、しかも運の悪いことに、行って1ヶ月目に交通事故に遭いまして、大した事故ではないけれど非常にショッキングな事故で、持ち物全部、パスポートも、トラベラーズ・チェックも、家の鍵も、全部取られてしまったんです。それで滞在許可証ももらってなかったんで、ビザから取り直さなくちゃいけないで、日本との連絡とか、大使館に行ったり警察に行ったり、保険が下りるかどうかが聞いたり、トラベラーズ・チェックのトーマス・クックの事務所に行ったり・・・。向こうのお役所とか、そういうところは非常に、頭が悪いのか、怠けているのか、なかなかうまくいかないわけですね。1箇所行くと、あっちいけとかこっちいけとか言って・・・。それで結局半年くらい棒に

振ったような気がするんですけど・・・。

だから留学して1年間というのは本当に、あまり知り合いもいなくて楽しくないし、勉強も進みませんでした。ル・ゴフたちも訳のわからない日本人が授業に出てるというくらいで、あまりしゃべりもしないし、というんで、変な顔で見ていたんです。それで本当に1年間くらいはつらかったですね。言葉もあまりしゃべれないし。だから授業に出て図書館に行くという感じでした。でも徐々にフランス人の知り合いや留学しているイタリア人、日本人や韓国人の友達もできて、ずいぶん落ちついて勉強できるようになったのがまあ2年目ですね。ル・ゴフやシュミットたちとも時間をとってもらって研究の相談に乗ってもらおうとか、あるいは、イタリアの家族史を研究しているクラピシュ=ズベールさんという人がいるんですけども、その授業なんかにも出ました。それは、非常に活発な、うらやましい授業なんですけれどね。というのはみんな専門が非常に近い人で、博士論文を準備していたり、あるいはすでにどっかの教授をやっていたりする人も授業に参加して、みんなで盛んな議論をして、それぞれ高度な、日本では考えられないくらい高度な授業になっていました。一緒に議論に参加するということはなかなかできないので、クラピシュさんの授業では、ときどき順番に発表したい人が発表していたんで、僕も家で準備して発表させてもらったり、あるいはル・ゴフやシュミットにも自分の書いたものを見せたりして、そういうのをきっかけに、認めてもらうまでは行かないかもしれないけれど、訳のわからない日本人が座ってるというだけではなくて、一応研究者として認めてもらうということを通じて、徐々に知り合いの度を深めていきました。

何が留学の一番の成果かという、そういう「アナル」という、非常にある意味でヨーロッパの歴史学をリードしているところの、その最先端の授業風景というかな、そこに混じってそういう雰囲気を経験できた、ということですね。遠く仰ぎ見ていたときよりも身近に、どういう雰囲気の中で研究者がどのようにして研究しているのか、ということがわかったし、日本から見ていると別世界の、偉大な人としか見えなけれども、行ってみると、割にふつうのおじさんだったりして、そういう親しみも湧いてくるんです。それからあと日本ではその頃イメージの研究なんかをやっている人はほとんどいなかったけれども、向こうに行くと、そういうことをやっている人が無数にいるわけですね。層の厚い研究者がいて、そういう人たちが活発な議論をしたり、どんどん研究を発表しているという雰囲気なり、風景というものを体験したことで、それまで非常に孤独な研究生活であったのが、ある意味でひとつの足場を見つけた、という気がしましたね。

それからもちろん国立図書館をはじめとして大きな図書館や文書館がいくつもあるわけだけれど、そういうものの利用の仕方もマスターして、非常に有益だったと思いますね。そういうところに行けば日本で勉強するよりも10倍くら

いの効率で、いろいろ調べたりできるわけで、今では短期的に行くだけですけれど、短期的に、2週間とか、1ヶ月とか行って、非常に効率的に仕事ができるようになった、という、そういう意味でも成果があったと思う。

クリオ：わかりました。高山先生はいかがですか。

高山：僕はもう『クリオ』（3・4号）でかなり詳しく報告していますけれど、アメリカのエール大学に5年半在籍しました。ただし、最後の1年はロンドンに住み、ケンブリッジに通っていました。留学するときは、英会話が全くできなかったし、準備もしていなかったのであまり行きたくなかったんです。城戸先生や樺山先生からは「君はアメリカの大学に留学した方がいいね」と言われていたんですが、自分から積極的に留学したいという気持ちはありませんでしたし、僕の周りの先輩や友人の間にも、当時は留学が必要だという空気はなかったと思います。ところが博士の1年目の初めの頃だったと思いますが、城戸先生が突然、「ハーヴァード・エンチン研究所の奨学金（大学教管用）の申請書が来ているんだけど、もし君に行く気があるのなら、申請だけでもさせてもらえるように手紙を書いてもいいけれど、どうしますか。」とおっしゃったんですね。僕はその場逃れに、「妻と相談させてください」と答えて、そのことを彼女に話したんですね。そしたら「ぜひお願いしなさい」と言うので、結局、この奨学金を申請して、アメリカ留学の準備を始めたんです。エール大学での指導教官はジョン・ボズウェル先生（昨年12月24日没）と、ロバート・ステイシー先生（イギリス史の専門家）でした。最初の2年間はコース・ワークという詰め込み教育の期間です。週3冊、週千二百ページ程度のペースで毎日毎日宿題をこなしていかなければなりません。また、1次史料を使った論文（リサーチペーパー）を1学期に1つか2つ、タームペーパーを1つか2つ提出します。さらに、語学試験もありますから、最初の2年間は何も考えずにひたすら与えられたものをこなすというだけでした。日本人であるということは全く考慮されません。ついてこれなければそこで帰って下さいということですから。とにかく与えられたものをこなしていくというだけの生活が2年間続きました。この2年間で何とか生き延びることができましたので、3年目には博士論文提出資格試験のための準備に入ることができました。3年目の終わりに資格試験に合格し、語学試験も一応全部合格しましたから、4年目からは博士論文の執筆に入ることができました。ここまでくれば英文で書くということ以外、日本でやるのと変わりません。ただ、意識は違っていたと思います。つまり自分が日本人であることを忘れてるんですね。当たり前のことですけど、国際学界の専門家たちに評価されなければ意味がない、という意識がありました。これは日本にいるときは特別のこのように思っていたんですが、それが研究者としてのボトムラインなんですね。エール大学にいたときは、日本人にとっての西欧中世史

研究だからという甘えは全く許されませんでした。

博士論文を書いている途中で妻の英国への転勤がありましたので、ロンドンに住んで、ケンブリッジに通うという生活を始めました。ケンブリッジ大学のデヴィッド・アブラフィアという先生が論文を見てくださったんです。結局、5年半で博士論文を書き上げました。その間2本の論文を欧米の専門誌に投稿し、掲載されることになりました。1つは *English Historical Review*、もう1つは *Papers of the British School at Rome* です。博士論文を仕上げるのに何年かかるかわからなかったの（エール大学での平均は8年弱）、論文として出せるものは出しておこうと思ったんです。

留学で得た一番大きなものは、自分に対して多少なりとも自信が持てるようになったということです。博士論文を書き上げることができたこと、激しい競争の中で生き延びることができたこと、TA（ティーチング・アシスタント）としてエール大学の学生たちを英語で教えたこと、卒業式でエール大学からロペス賞（最優秀中世史博士論文賞）を授与されたことが、その背景にあると思います。苦しい授業については様々な思い出がありますが、僕を含めて学生が2人の個人指導の授業では、本の内容について質問され、答えられないことがたびたびありました。先生ともう1人の学生は僕が答えるのをじっと待っているんですが、僕は何も答えられず、みじめな気持ちの中で時間だけが過ぎていくんです。そういう時、意識がふうっと遠のき、周りの世界が何か自分とは関係のない世界に見えてくるんですが、その感覚を今でも鮮明に覚えています。

留学で得た第2の大事なものは、日本とは違う論理で動いている社会があるということを経験したということですね。アメリカの社会は厳しい競争社会ですから、怠けたり油断しているとすぐに脱落してしまいます。高等教育のシステムもこのような競争原理の上に構築されていますから、日本のシステムに比べると非人間的で過酷に見えるかもしれません。しかし、優秀な学生は生まれていますし、すぐれた研究成果も出ていますから、優秀な研究者を育成するという点から見れば、優れたシステムだと思います。今、日本の大学や大学院は制度改革の中、このアメリカの制度を取り入れようとしていますね。

～わが国における西洋史研究：戦後史学～

クリオ：日本における西洋中世史研究は、戦後史学のグランド・セオリーが中心の研究が脈々と受け継がれていて、ちょうど先生方が歴史学を志した頃にひとつの転換点を迎えていたのではないかと思うんです。先生方が学生時代に、上の先生方から学んだ、あるいは肌で感じた戦後史学に対する意識なりスタンスなりを現在どのようなかたちでお持ちなのか、その辺についてはいかがでしょう。

池上：戦後史学というのは具体的にどういうことをイメージしているんですか。

クリオ：昨今の個別実証主義に対し、例えば奴隷制論争であるとか、封建制論争であるとか、アプリアリに設定された大きな理論的枠組み（グランドセオリー）で事態を捉らえていく学問姿勢でしょうか。

池上：僕は初めから興味なかったなあ。もちろん大きな理論とか大きな視野である時代とか社会を捉えることが必要なのは感じているけど、出発点としてそういうのを据えようとは初めから思わなかったですね。自分の肌に合わないということもあったかもしれないけど、それなら自分で肌にあったものを学び、作っていきこうと感じていましたけど。

クリオ：それでは特別な意識というのはなかったというか、もう最初から関心の対象外ということだったんですね。

池上：もちろんいくつか読んだことは読んだし、多少は興味を持ったものもあるんですけど、自分の研究に深く関わらせようとは思わなかったですね。

高山：僕の場合、個別の情報がある程度たまと自分なりに過去の社会のイメージを作ることができるし、時代の流れも自分なりに認識できるんですけども、誰かに、過去の社会の単純化された構造を示されたり、それに基づく変化の法則性を提示されても、率直に受け入れることができないんです。それは僕が生きてきた時代のせいなのか、僕の個人的な性格なのかわかりませんが、歴史に関する限り自分である程度情報を集積して、納得しないと、提示された理論を使ったり、抽象的な議論をすることは難しいですね。戦後史学的なやり方にはかなり懐疑的なものかもしれないですね。

～わが国における「社会史」の受容～

クリオ：先生方の学生時代は、ちょうど日本に「社会史」が芽ばえ始めた時期にあたると思います。フランスから「アナール」の思想が紹介されるようになったのがこの頃ですし、先ほど池上先生が言及しておられました『思想』の630号には、山口昌男先生の歴史人類学（人類学的歴史学）の論文ですとか、あるいは来日したルゴフの講演が翻訳・掲載されています。その後「社会史」がわが国の歴史学に浸透し、今ではある程度の成熟を見せていると思うのですが、日本における「社会史」の現在の状況についてどのような印象をお持ちでしょうか。

池上：日本における「アナール」の紹介が山口昌男さんであった、ということからも窺われるように、日本ではもともと歴史家は、中世史も含めて、率先して「アナール」の思想を受け入れるという態勢が整っていたとは思えないんですね。むしろ一般受けしたわけです。まあ、翻訳がどんどん出るようになって、アナールの実証研究よりも、翻訳を出したり紹介でも書いたり、というのがずっと何年も続いていて、それなりに成熟したと言えば成熟したし、まあ、よく知られるようになったのは事実ですよ。一方で、阿部謹也さんがアナールとは違う独自の社会史を構想されて、面白い、たくさん読まれた本を書かれて

・・・

クリオ：ちょうど1974年に阿部先生の、ドイツ騎士修道会を扱った『ドイツ中世後期の世界』、それから阿部先生独自の社会史的手法の原点ともいえる『ハーメルンの笛吹き男』が出版されていますね。

池上：ええ、われわれの世代では阿部さんの社会史の方がよく知られてました。

クリオ：受け入れやすかったということもあったのでしょうか。

池上：まあ日本語で読めるということもあるけれども、中世史に関してはそうだったんですね。アナル流の社会史が、様々な手法やそれを使った大きな研究がどんどん紹介されるようになったのは、もうちょっと後のことですよね。その1974年以後すぐというよりも、ここ10年くらいのうちに広まっていったという感じでしょう。しかし、残念なことに、そういう手法を自らのものにして自分の研究に使っているという人は、近代史では割合最近出てきたと思うんですけど、中世史ではまだ非常に少ないんじゃないでしょうか。それは別にいけないと言ってるわけじゃなくて、まあアナルなんかどうでもいいと言えどもいいんですね。アナルを猿真似する必要は全然ないわけです（笑）。でもつねに新しい方法を意識するというか、新しい対象とか方法を自分なりに考えていくというのは非常に大切だと思います。社会史といっても、最後には自分流というか、日本流というか、社会史をつくらないとつまらないと思うんですね。ドイツ史をやっている人はドイツ流の社会史をやって、イギリス史をやっている人はみんなトムスンとホブズボームをやって、フランス史をやっている人はアナルの真似をして、自分の研究対象の国の社会史を真似して持ってくるだけじゃダメだと思います。そこでもやっぱり独自のものを作らないといけない。独自のものを作るというのは、阿部さんみたいに恐るべき力業で1人でやっちゃうという人もいるけれども、それは研究者の層の厚さとか、ある意味でいう共同作業が必要というところもあると思うんですね。もちろん歴史家がそれぞれの方法でどんどんやってもいいんだけど、ある程度の集団がやることで、より良いものになるし、より有効なものになるし、より学界的に認知されるようになるということがあるわけだから、そういう意味で、そうした動きは日本にはないんじゃないかというのが、悲しいところですね。

クリオ：この点について高山先生はいかがでしょう。

高山：皆さんは「社会史」に対してどのようなイメージを持っているんですか。つまりどのような研究を「社会史」と考えているんですか。

クリオ：「社会史」と聞いてまず念頭に浮かぶのはやはり「アナル」の社会史ですね。これは方法および対象において、従来の研究とは大きく異なる特徴を有していると思います。対象としては、儀礼であるとか象徴であるとか、それから池上先生が書いていらっしゃるようなイマジネールの世界であるとか、これまでの日本の西洋史研究には全く欠けていたものですね。また方法論としては、例えば、それまでの日本の歴史研究が、ひとつの大きな、従って俯瞰による理論を

打ち立てて、それを個々に証明していく、というプロセスで行われていたと思うんですけども、「社会史」はミクロの視点に立って、つまり全体の歴史から見れば極小部分に光を当てて、そこにマクロを読み取っていく。他にもあるでしょうけれど、このような特徴が一応指摘できるのではないのでしょうか。

高山：わかりました。誤解があると困ると思って確認したんですけど、僕は「社会史」という言葉から2つの事柄を連想するんですね。ひとつは、全体史、つまり人間活動の総体を様々な側面を含めて見ていこうという考え方ですね。もう一つは、今説明してくれたような、既存の政治史や経済史などに含まれなかった部分を研究の対象としたものです。後者、つまり、従来扱われてこなかった分野やテーマを対象とするという意味での「社会史」に関しては、池上さんがさっきおっしゃったことに付け加えることはありません。全体史という意味での「社会史」については、人間の過去の活動を様々な角度から認識したいという欲求があれば、研究者は、可能なあらゆる方法を使うわけですから、あえて「社会史」という言葉を使わなくてもいいんじゃないかな、とも思うんですけどね。

池上：ええ、そうですね。「社会史」というのは曖昧ですからね。むしろそれが存在理由だと思うんだけど、まあ、特に「社会史」と言わなくても、単に「歴史」と言った方がいいわけですね。

～今日の西洋中世史研究～

クリオ：それでは先生方は最近における西洋中世史研究一般についてどのような印象をお持ちですか。

池上：そうですね。もちろん『回顧と展望（史学雑誌）』なり、史学雑誌の西洋史文献目録を見ると、非常な数ですよ、西洋中世史だけでも。これだけの論文が出ていること自体たいへん喜ばしいことだと思います。しかし他方で、方法的に新しい試みをやってうまくいっているものはあまりないんじゃないでしょうか。むしろ非常に細分化された専門領域の中の、どういう問題関心なのかさほど明確ではない、個別の地域研究というのが非常に増えているという印象を受けています。そういう地域研究の中でも、非常にオリジナリティーの高い研究とそうではないのがあるわけですけども、そういう個別の地域研究が増えてくるというのはそれはもう時代の要請というか、つまり高度な産業社会では、学問のみならず、芸術でも商業でも、あらゆる分野の専門知識・技術なしには成り立たないわけですよ。つまり専門家というのは、そういうことをどこかでやらないと専門家とはいえないという意味で、こういうのが必然だと思うわけです。また、やはり時代の必然として、学問の大衆化とか、生涯学習とかいわれるけど、学問が大衆化して、みんなが、おじいさんもおばあさんも、会社員も知識を追及するというのもある意味で必然だと思うんですね。そしてそち

らの方は教養というふうにいわれているんだけど、教養というのは趣味と紙一重で、さっき高山君が言った地獄の苦しみとは縁もゆかりもない世界なわけですね。そういう気楽な教養を積んで、ファッションみたいにならうと、そういうところで「歴史」を学んでいこうという、そういう人たちの需要というのは相当大きいですよ。そういう人たちが求めたり、実際に学んでいる知識というのは、俗受けはするけど深みがなくて、時にいかがわしくなったりするという危険があるわけですよ。僕は今、専門研究と「教養」や「ファッション」としての学問の溝をどう埋めるか、そのための「言葉」と「方法」を探しているんです。

クリオ：実証に力点が置かれてきたという傾向は、日本にも史料が揃い始めたということに関係があるのではないかと・・・

池上：そうですね。もちろん簡単に海外史料が手に入るようになったということとも関係あるし、逆に大きなことが言いがづらくなったこともある。大きなことを言うためには、さっきの大衆化した教養のところでは多少の法螺も吹けるかもしれないけど、学者たるもの、そういった個別の成果に則って大きなことを言わなければいけないわけですよ。それをいうのは非常に大変なことです。

クリオ：はっきり言うと、もう個人の手に余るという状態に近づきつつある・・・。

池上：そう、非常に難しいことですね。一番いいのは個別研究をやりながら、大きなことを言えればいいんですけど、それができなければ資質に応じて分業するしかないでしょうね。いずれにせよ、個別の細かな専門のことをやる人でも、つねにそういう大きな流れをどこかで意識して、それについての何かの考えをもつように努力していかないと意義のある研究はできないと思います。

高山：この問題について僕はちょっと見方を変えて言いますが、私たちは学問として歴史を研究する、つまり過去を認識しようとしているわけですよ。その場合に能力的に限界がありますから、特定の時代や地域に限定して、研究するということはどうしても必要ですよ。それと同時に歴史学は時間の学問、変化の学問ですから、その動き、時代の流れを認識したいという欲求もあるわけです。だから、先ほど話題になっていた戦後史学のグランド・セオリー、つまり、結論を共有するような枠組み、とは異なるものだとしても、時代の流れを認識するための枠組みは必要なわけですよ。私たちは、過去を認識する時に、誰かが作った枠組みを使わせてもらったり、自分の枠組みを作ったりしているのではないかと考えています。だから、もし、過去をよりよく認識したいという欲求があるなら、その枠組みはつねに変化するのではないかと思います。歴史を研究しようとする人たちは、修正しながらですが、そうした認識の枠組みをつねに持っているんだと思います。自分で作っては壊し、作っては壊しているのか、それともすでに共有されたと思っている枠組みに乗って過去を認識しているのかはわかりませんが。

最近の西洋中世史研究の動向については、今年の『史学雑誌』の「回顧と展

望」にも書きましたが、研究の国際化を忘れてはいけないと思いますね。この動きは止めようとしても止まらないでしょうから、好き嫌いにかかわらず自分の身の処し方を考えていく必要があるのではないかと思います。これは後輩に対しての忠告ですけど、今後は国際学界に対して自分の仕事を組み立てていく必要が生じてくると思います。研究者の中には、日本人である私たちがそこまでする必要はないと考える人たちもいるでしょうが、周りの人たち、つまり西洋史研究者以外の人たちはもう今までのような眼では見てくれなくなっているんじゃないかと思っているんです。ビジネスの世界や自然科学の分野では、自分の仕事の成果は国際的な場で評価されるという状況になっています。日本の西洋中世史研究者たちが自分たちの仕事をどのように位置づけようと、周りの人達は私たちの仕事を国際学界の中で評価するようになりつつあるのではないかと思っているんです。

池上：「周りの人」というのは具体的にはどういうこと？他の研究に携わっている人？

高山：そうですね。他の研究に携わっている人たち、それからもっと掘げて言えば、学問に関わっていない人たちもそういえるかもしれません。すでに大学の自己評価という形で、私たちの研究業績や成果は定期的にチェックされるようになりました。これからは自分の仕事が他者から評価される機会がますます増えていくんじゃないかと思います。その場合、誰が評価するのか気になるのですが、どのような方向に進むのかはわかりません。当然専門家どうして評価しあうということはあるでしょう。しかし専門以外の人たちが評価することになるかもしれない。その場合、国際的にどう評価されているのかは、たぶん重要な判断の基準に入ってくるんじゃないかと思うんです。そのための心の準備をしておいた方がいいんじゃないかという気がします。また、日本の大学のポスト、研究者ポストを欧米の研究者たちと争うということもありうるでしょうね。

クリオ：そのような国際化が進んでいくと、次第に自分のやっている西洋史と、自分が生まれたときからもっている基盤、つまり日本人であるということとの関係がやはり問い直されてくるということになるのでしょうか。

高山：その問題はこれまでもありましたし、これからだってそうでしょう。ただ日本人であることを意識させられる機会は増えるかもしれませんね。

池上：ここで高山君と少し違うかもしれないと思うのは、僕は、日本人であり、日本で生活し、日本語で日本人に向かって西洋史を書く、ということをしている自分とは何か、ということをつねに強く意識しているということです。高山君の仕事を見ていると、日本人であることをすでに括弧に入れてしまっていて、その上で国際的な舞台に乗り出して、優れた仕事をされていると思うんだけど、またはそういうふうに見えてしまうんだけど、僕はつねに何というか自分のいるところからしか何も表現できないと思うんです。歴史という学問は、社会科学でありながらそうでない部分もあると。社会科学ならば、もしかしたら日本人であることを全く括弧に入れてしまってもあまり問題にならないところまできて

いるのかもしれないけど、歴史学というのは一種の人間学ですよ。歴史家の主観でもって過去の客観を見つけていくという、まあ過去の客観というのは客観であると了解された主観なのかもしれないけど……。だとするならば、何とか無色透明の無機質的な作業でできる学問ではない、というかいわば不純なものが絶えずつきまとっていて、逆にそれが大きな存在理由なんだと思います。だから僕はもちろん外国の研究を非常に使わせてもらっているし、また外国の研究者たちが使っているような史料も使うわけだけど、やはり僕にしか出せない視点というものがあろうと思うわけです。こういう生活環境の中に、こういう人生を歩んできた自分の価値体系の中から何か発想してやってみないと僕は考えています。

高山：僕自身の考えは池上さんがおっしゃっていることとそんなに変わらないと思うんです。自分が日本人であることを意識しようとしていないのは、おっしゃるとおりだと思います。しかし、自分の今までの経験や自分が属している文化から結局は抜けきれないということは、自覚しているつもりです。僕がどんなにあがこうとも、僕が日本人であることを止めることはできませんし、僕が生きてきた日本文化から逃れることはできないと思います。それでも僕は、国籍や文化的バックグラウンドに関係なく、より多くの人たちが理解してくれるようなものを書きたいと思っています。そしてこれは理想なんですけれど、様々な人間集団が経験してきた過去、つまり人類の歴史についての知の集積は存在しようと考えているんです。あるいは僕自身がそう考えたいということなのかもしれませんが、僕たちが受け継いでいるものは、欧米で書かれ研究されたものでもあるし、日本で研究され書かれたものでもあるわけです。そういうもの全体を含めて、僕は人類の知的な共有財産という具合に認識しているんです。その知的共有財産に対して貢献したいという欲求があり、それが僕が学問を行う目的でもあるんです。もし貢献できれば自分が今やっている事柄に対して満足できるということなんです。

～テキスト論～

クリオ：先生方はそれぞれの立場、関心から、これまで膨大な量の1次史料を読まれてきたことと思います。そこで、史料を読んでゆく際に、その中に実際に書かれていることの信憑性をどのように確定していくのか、あるいは、中世に書かれた史料には、当時の人間には理解できても、われわれには幾つかのフィルターを通すなり、外すなりしないと理解できないような、いわばエクリチュールに関する約束事のようなものがあると思うのですが、これらの問題をどうクリアしていけばよいのか、といった最近話題にのぼることの多い「言語論的転回」の問題について、先生方はどのようにお考えなのでしょうか。

池上：いま言われたようなレベルというか問題は、伝統的な史料批判なり「ディプロ

マティーク」がカバーしてる問題じゃないですか。いわゆる歴史学概論なんかで言われる史料の扱いですよ。例えばある年代記に書かれていることが捏造なのか正しいのか、ということは、いろんなプロセスを経ないと確認できないと思うんですけど、そういうレベルの問題で言えば、ディプロマティークとかコーディロジーとかそういう技術的な学問、いわゆる実証史学の方法論ですよ、それが解答を与えてくれると思うんですけど。しかしより大切な問題はその後にあるわけですね、最近言われてるように。今言った実証史学の方法論というのは、歴史学をやる者は全員やらなくてはならないというのが最低要件、というか、実際にやるかどうかは別にして、まあ建前ですよ。そのあとで、じゃあその実証主義的な方法論だけでいいのかということは非常に問題だと思います。君たちが何を聞きたいのかわからないけど、テキストと現実の関係とか、そういうことですか。

クリオ：そうですね。テキスト・クリティークを経た刊行史料を読んでいく際に、作者の立場や著述の目的を踏まえて見ていかないと、それに依拠した考察は偏ったものになる危険性がありますよね。

池上：それはそうですね。

クリオ：われわれがそれを読み取っていくさいの方法、あるいはその際に気をつけるべきことは一体何なのでしょう。

池上：史料がひとつしかなければ、それを信じるか信じないかしかないわけですよ。古代史などはひとつしかない史料がいっぱいあって、みんなどうしてあのかたちで信じるができるのかっていつも不思議に思うんだけどね（笑）。でも、そのひとつの史料によってしかある現実を知り得ないということがあったとすると、それはその他のいろんな事件なり、社会の仕組みなりから、妥当性や整合性を推論するしかないですよ。

クリオ：高山先生はこうした史料をめぐる問題についてどのようにお考えですか。

高山：私たちが歴史研究者として史料を扱う場合に、押さえておかななくてはならないのは、何よりもまず技術だと思います。技術というのは、文字の判読法や省略法の習得から始まって、暦の制度や公文書の書式の変遷に関する知識、文書が出される仕組み、インクや羊皮紙の特徴に関する知識などです。これらの技術に関してはずでに欧米に相当の蓄積があり、個別の問題に特化した学問領域も成立しています。これらの技術を身につけているということが、史料を論じたり扱ったりするときの第1の前提だと思いますね。テキストから何を読み取ることができるかという問題を考えるだけでいいのなら、これらの技術なしに済ませてもいいと思いますが、もし過去の「現実」、人間の思考や感情も含めてですけど、その「現実」を認識しようとするのであれば、この技術は不可欠です。技術は時間さえかければ習得できるものですから、歴史研究者になろうと思っている人はきちんと学ぶべきだと思います。活字になった史料は通常、古文書学者たちの解釈や推測によって加工されたものですから、このような技

術を持たない人は、どのような加工がなされたのかもわからないことになり
ます。先ほどおっしゃった史料の内容の問題はこれらの技術がクリアされている、
あるいは技術的な限界が了解された上での問題なんですね。もちろん、現実の
研究においては、両者を同時平行的にやるというのが普通なんですが、どうも
努力すれば習得でき、なおかつ重要な技術の問題がおろそかにされているよ
うな気がします。

実際には技術を習得したからといって史料が読めるようになるわけではあり
ません。また、不確定要素はつねに存在します。しかし、私たちは、自分が
持っている技術と情報をぜんぶ使って史料をチェックしていくしかないわけ
です。信頼できる様々な個別の情報、たとえば、司教のリストや役人のリスト、
人物研究（プロソポグラフィ）、地名研究などがあると、史料を読む場合に
は非常に有用です。しかし、その司教のリストそのものが危ういということに
なると、全体が揺らいでできますね。一体最初の信頼の根拠はどこにおけばいい
のか。これは僕がシチリアを研究しながらつねに抱えていた問題です。僕はそ
の最終的な信頼の根拠を見つけることはできませんでした。僕が使った史料全
体が誤った根拠の上に乗っているんじゃないかという不安を最後まで拭い去る
ことができなかつたんです。今でも僕は原史料を非常に不確実なものだとい
う前提で扱っています。

史料から過去の何を読み取っていくかという問題については、まず、そこに
書かれていることがらの中に、われわれが容易に引き出しうる情報とそうでな
い情報とがあるということです。例えば、王様が何年に死んだか、というのは
わりと確定しやすい情報なんですが、その時代に生きている人々の集合心性と
か価値観とか、人の感情、そういうものについての情報を得るのは非常に難し
いわけです。現在書かれているものを無作為に選んで、その史料から現代人の
共有する心性を読み解こうとしているのと同じわけですから。

クリオ：そうするとそこに歴史家一人一人の基盤に基づいた「解釈」が生じてこざるを
得なくて、それはある程度主観性を伴ったものであるわけですが、その
「解釈」をどう扱えばいいのでしょうか。主観的解釈が介在しなくてはなら
ないという状況と、歴史家が、ある括弧つきの過去の事実を復元するという客観
の部分とのあいだに齟齬が生じはしないか、というのが最近の指摘だと思うん
ですが・・・

高山：結論から言えば、われわれは過去を、客観的に復元することも認識することも
できないでしょう。これを前提に私たちは過去を研究しているんだと思います。
なぜ最終的には客観的に復元しえない過去を、できるだけ客観的に復元しよ
うとしているのかというと、それは私たちに過去を知りたいという欲求があるか
ら、もっと正確に言えば、過去をよりよく認識したいという欲求があるからで
しょう。この欲求がある限りは過去をより客観的に復元しようという歴史研究
者の営みは続いていくんじゃないかと思います。つねに修正されながらでしよ

うけれども、この知的営為は続いていくと思います。過去は結局客観的に復元することも客観的に認識することもできないのだから、そのような行為は意味がないということではないんです。

クリオ：そう考えてくると、歴史は歴史家のひとつの自己主張、自己表現である、ということにならないでしょうか。また、歴史は科学と文学の両領域に基盤を置いていて、これは歴史学という学問のきわめて特異な部分だと思うんですけども……。

高山：僕は、自然科学の場合も、例えば物理学でも化学でも、絶対的な客観性を保証されているわけではないし、究極の真理あるいは現実を手にすることができるとも考えていません。自然科学や社会科学として区分されているような学問分野も、人間が、自分たちの生活している世界（外界）を認識するための知的営為と考えられるのではないかと思っています。歴史家は過去の人間社会に関する断片的な情報を集めて、その社会を認識するための枠組みを作る。物理学者は外界の自然現象に関する断片的な情報を集めて、その現象を理解するための説明の体系を作ると考えてもいいのではないのでしょうか。そのように考えると、「実験」は自然現象を確認するための手続きということになります。水（ H_2O ）が水素と酸素からできている、というのも説明の体系の一部ということになります。つまり、外界を認識するための手段と考えられるわけです。私たちが外界を認識するというのはそういうことではないのでしょうか。外界を客観的に認識するというのも最終的には不可能だと思います。しかし、私たちはわかろうと努力しているんですね。つまり、より良く認識しようとしているんですね。最終的には不可能だとしても、私たちが住んでいる世界に関するより客観的な、つまりより整合性のある説明体系を作りたいという意志、あるいは別の言葉で言えば、たとえ究極的には不可能であろうと、私たちが住んでいる世界をよりよく認識したいという欲求を、学問をやっている人たちはたぶん共有しているのではないかと僕は期待しています。

クリオ：歴史学は、叙述という点で文学的要素を持ち、叙述に説得力を持たせるために一定の決められた科学的手続きをふむ、という点で科学性を有する、ということになるのでしょうか。

高山：物語性は説明という点では全ての学問、知的活動に共通していると思います。ただ、歴史学は、意味内容を限定されたテクニカルタームで説明体系を作るのでも、一定の約束事に従って説明の体系を作るのでもありませんし、私たちが通常用いる語彙を使って過去の人間活動を説明するんですね。書かれた説明が、同じテーマで、同じ史料を使った研究であっても、筆者によって説得力が全然違ってくるということは皆さん御存知のとおりです。史料から私たちが手に入る情報も様々で、なかには説得力をもって語るものがきわめて困難なものもあります。私たちは説明という点では、信頼性のある史料に基づいて、どれだけ整合的に説得力をもって過去を説明することができるかを問われるのではな

いでしょうか。

池上：つまり、歴史学は自然科学と違って、言葉の世界を相手にする「メタレベル」の学問ですよ。言葉の世界、史料といえば史料なんだけれども、これを相手にしてなおかつこれを言葉で解釈していくという、まあ言葉と言葉の対話であって、対決であるわけですね。そしてそれをうまく解釈したものをさらに言葉で叙述するわけだけれども、そうした作業をしていく中で、史料の外に現実がある、ということを経験家なら必ず確信してるわけですね。確信がなくてそんなことやってるひとは一人もいないと思う。それは歴史家じゃないわけです。最近流行の過激な不可知論とか懐疑論は、史料はテキストにすぎず、外の現実とは何の関係もない、というふうに言っている。でも史料を通してしか知り得ないということ、つまり、現実への通路が非常に限られていると認めることと、史料の外部の現実を否定することとは全然別問題で、現実はあると歴史家はみんな信じている。別に信じない人がいてもいいんだけど、信じているから、あるいは皆信じたから歴史に向かうのではないですか。

～異文化接触～

クリオ：先生方には、ある種の「異文化接触」を研究対象としている、という共通点があるのではないかと思います。高山先生についてはラテン・キリスト、アラブ・イスラム、ギリシア・ビザンツという同時代の水平的異文化接触を、池上先生については、エリート文化と民衆文化、キリスト教文化と原始宗教の文化といった、同時代の垂直的異文化接触（あるいはその変遷）をそれぞれ研究されていると思うのですが、その際の問題意識などについてお聞かせ願えますか。

池上：僕の場合は異文化接触を研究したいという欲求が最初にある訳ではないんですね。身分とか、階級とか、支配の在り方といった、いくぶん古臭い問題もたしかに大切だとは思いますが、多様なソシアビリテと、それを支え、あるいはそこから生まれてくるマンタリテ、といったものが現在アナルなんかの研究でも主流になってきていて、僕はそちらの方に興味があるんです。そのマンタリテ、あるいはもっと普通の言葉で「文化」と言い換えてもいいけれど、それを捉えていくにはどうしたらいいのか。文化は一枚岩ではなく、かといって支配者の文化とそれに隷属するものたちの文化がある、というわけでもない。ある多層、多面の文化というものをそれぞれの社会集団が、その置かれた場とその場におけるプラティークというか、慣習的な行動ないし姿勢によって領有して、しかも同時に表現している。それで各々の文化間の関係というのは必ずしもピラミッド型の上下関係ではなくて、多様な相互関係である、と最近言われていて、その辺までは、僕もいいと思うんです。エリート文化と民衆文化とか、キリスト教と自然宗教ないし異教とかいう言葉を僕もつい使ってしまうけれども、本当は使いたくないんですね。異教なんて言葉は実はたいへん傲慢な言い方です

し・・・(笑)。またエリート文化と民衆文化と言うとどうしてもそれらが上下に重なり合っているというイメージになってしまう。

じゃあ僕は僕なりにどう考えたいかという、こうした諸文化を全て包み込むイメージの構造とかマンタリテの構造、文化の深層構造があると考えたいわけです。そこにおいて、様々な社会集団なり、支配関係なり、イデオロギーなり、それらがぶつかりあっている訳だけれども、僕は、そこにおける表現というか、表出の諸相がキリスト教として表れたり、異教として表れたり、エリート的なものとして表れたり、民衆的なものとして表れたりする、と考えたい。多層的、多元的なんだけど同時に一元的なもの、というかね。これは非常に古めかしいドイツの「時代精神 (Zeitgeist)」みたいなものになってしまうかもしれないけれど、ただ Zeitgeist の場合は文化史 (Kulturgeschichte) 中心であって、そうではなくてもっと深層まで含んだかたちでの《時代の魂》のようなものがあるような気がして、それが多様な表れ方をする。その表れ方とその変化を説明するには、イデオロギーや社会関係や、政治的事件や、経済体制や環境の変化や、外部世界との関わりなどの様々な要因を入れていかないといけないんだけど、そうした多数の要因の組み合わせだけでは到底説明し尽くせないのではないのでしょうか。例えばロマネスクの時代からゴシック時代へと時代が変わっていくと、それに応じて社会や文化も変わっていくけれど、なぜそれらが変わったのかという、それは結局は《時代の魂》が変わったからだとは僕は考えるわけです。エリート文化だ、民衆文化だ、キリスト教だ、あるいはもっと細かく分けて考えていくこともできるけど、それら全体が織りなすひとつの模様が変わっていくんじゃないか、と僕は考えます。幻影のように立ち昇ってくるその魂の模様を自分の言葉でうまく述べられたらと願っています。その観点からの「全体史」を今、執筆しているんです。

クリオ：ということは、ある記号的な事象、例えば「聖なるパン」に対する受けとめ方なども、やはりその《時代の魂》が変わるとともに、すべて変わってくるのでしょうか。

池上：そう、だから意味が変わるというのかな、まあその意味は文脈によって決まると言えば言えるんだけど、その意味を吹き込む魂があるっていうかね、それが、なぜ時代も場所もかけはなれた僕の魂に感応して、僕にわかるかっていうのはまた不思議なんだけれどもね(笑)。それがまた歴史の面白いところであり、神秘的なところなんだと思います。

クリオ：そのような、時代が織りなす模様は、古代、中世、近世、近代というような大きな枠組みではなくて、もっときめ細やかに展開していくのでしょうか。

池上：まあいくらでも分けられると思うんですよ。地域によって違う、と言ってもいい。けれども僕は今までヨーロッパ全体を対象としてきたわけで、それは何故かという、ヨーロッパ文明、あるいはヨーロッパ文化といったものに全体として興味があるからなんですね。それに興味があるのは日本人として他者、ま

あいわば半分他者で半分他者じゃない者として興味があるわけですけども、そのヨーロッパ文化の根っこを探究することで自己確認したいという動機もあります。ヨーロッパがいつできあがったかというのは、僕の修論以来の持論は、10世紀末から12世紀初めにかけてのロマネスク期に最初のかたちが整って、魂が吹き込まれたと思うんですね。それがゴシックに変化して、その後ルネッサンスになり、近代まで変わってきたわけで、近代から現代にいたると、もうそのかたちがあまりにも拡散して、世界化して、国際化してしまっ、もうヨーロッパ文明なんてことを言わなくてもいいような時代になりつつあるのかもしれない。それでもまだヨーロッパというようなものには意味があると思っているから研究を続けていますが、もしそれに意味がなくなったら僕はヨーロッパ史をやめるかもしれません。そういう意味で、現在に生きる、日本人である僕は、研究してるんじゃないかな、と今は思っているんです。

クリオ：その魂を吹き込む、いわば一種の「吹子」のような感じで、その真ん中に陣取っているのが、「キリスト教」ということになるのでしょうか。

池上：必ずしもそうではないですね。キリスト教もそのひとつの表れにすぎないし、同じキリスト教でも、絶えず姿を、あるいは意味を変えていくわけです。

高山：僕にも池上さんがおっしゃってるのと同じような関心はありますが、僕の場合は基本的に世界史を認識したいという強い欲求がありますね。要するに、自分の位置を確認したいということ、アイデンティティと言っているのかもしれない。

池上：それは一緒だ、というわけだよね、違った？

高山：そうです。自分自身の位置を確認するためには他者と比較すること、つまり、自己の相対化が必要となってきますよね。それで僕の中で一番遠いところにあり、とても異なったものであると思われたイスラムとヨーロッパに惹かれた、ということだと思います。今はラテン・キリスト教、アラブ・イスラム、それからギリシャ・ビザンツ文化圏を含んだ、僕自身の認識の枠組みをつくらうとしていますが、根底には、僕なりに世界史の流れを認識したい、という欲求があるんです。従って、最終的には自分が属する日本も含んだ世界の歴史を認識したいと思っているんですね。

ところで、私たちは、ラテン・キリスト教文化、アラブ・イスラム文化、それからギリシャ・ビザンツ文化といった3つの文化圏を想定しています。しかし、それぞれを比較して、違いが見えてこなければ、3つの文化圏を含むような歴史の枠組みは作れないんじゃないかと思っているんですね。そういう意味でシチリアは研究対象として非常にいい場所なんです。複数の文化的要素が同じ支配圏の中にあるわけですから。ところが今まで勉強してきて、3つの文化の中で自分のフィールドにいちばん近いラテン・キリスト教文化すら比較の材料として使えないということがわかりました。つまり、他の研究者たちが出してくれた研究成果や分析概念を使ってシチリアを説明しようとしてもなかなか

うまくいかないんですね。ヨーロッパ間の地域的偏差がきちんと整理されずに一般化された概念が多いせいだと思います。例えば、実際には同じラテン語の官職名をもつ役人が、フランスのある地域で用いられているものとシチリアで用いられているものでは役割・機能が全然違い、逆に全く違った名称を持っているけれども、同じような役割を果たしている例がしばしば見られるんですが、それがきちんと認識されずに、間違っ理解されているようなんです。また、ヨーロッパ的なものと思っていたものが、果たしてヨーロッパに共通していて、イスラム世界やギリシャ・ビザンツ世界にはないものなのか、疑問に感じ始めたということもあります。他の2つの文化圏にはなくて、ヨーロッパだけに共通しているものだったらそれはヨーロッパ的なものだとえるでしょうが、もし、言葉は違っていても同じような機能を果たしているものがイスラム世界やビザンツ世界にあれば、それはヨーロッパ的なものと言えないはずですからね。

というわけで、僕は今、ヨーロッパに共通しているものと地域的偏差を持っているものを自分の頭の中で整理しようとしているんです。具体的には、ヨーロッパ諸地域の制度の比較研究をやり始めたんですね。自分なりに、フランス、ドイツ、イギリス、スペイン、イタリアで共通しているもの、違っているものを確認しておこうというわけです。これから10年、もっとかかるかもしれませんが、そうした比較をやった後にもう一度地中海に戻ってこようと思っています。そして、ラテン・キリスト教文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏という枠組みが有効なのかどうかを確認するつもりです。もしそれが有効であれば、それぞれの特徴は何なのか、その枠組みがどれくらいの期間で有効なのか、その後はどのような枠組みが有効なのかをチェックしようと思っています。その作業でまた10年か20年くらいかかるでしょう。そしてその後はね、これが僕のライフワークなんですけれど、中国、日本、東南アジア、インドを含めて、過去を認識する枠組みをつくっていきたいと思っています。それで僕の一生はもう完全に終わることになります（笑）。

～学生に一言～

クリオ：最後に、今の学生、大学院生に一言お願いします。

池上：そうですね、われわれの時代よりもだんだん状況が厳しくなっているんじゃないかという気がしますね。われわれの時代も城戸先生や樺山先生に尻を叩かれ、ようやく何とか仕事をまとめていったんですが、それでもわれわれの時代は途中でドロップアウトするという率は非常に少なかったですね。でもこれからは教育方針が変わってきたようで、東大だけじゃなく、日本全体を含めてそうだと思うんです。仲間を蹴落としながら、何とか生き残らないといけないというのは非常に気の毒でかわいそうなことだ、と思います。自分が将来どういう研究者になるかとか、就職のことを考えると不安でたまらないと思うんですけど、

偶然なんですね、これは。運がよければ就職できるし、運が悪ければ就職できないし。まあ運も実力のうちだといえどそうだけれども、必ずしもいわゆる実力だけで決まるものではないんですね。そういうことにはそれほど悩まずに、とにかく夢中で勉強するというのを修士なり博士の時に一回はやらないと、後がだめだと思う。夢中で勉強しても成果があがらないときもあるし、まあ高山君が修論をだす直前のインスピレーションという話があって、僕もその前後の彼の様子を鮮明に覚えてるけど、やはりインスピレーションが湧かないと論文は書けないですね。技術的なものだけでは論文は書けない。でもインスピレーションは湧かせようと思って湧くものでもなくて、必死に勉強していてフッと息を抜いたときにあらわれるんですよ。だからやっぱり勉強するしかないんじゃないですか（笑）。

高山：全くその通りですね。これからは競争させて実力のある者のみを生き残らせるというアメリカ型に移行していくでしょう。また、さっきも言いましたけれど、研究者は厳しく評価されるようになるでしょう。君たちも、僕たちも、プロとしての自覚を持たないといけないと思います。苦しい修行や訓練抜きにおいしい果実のみを収穫したいと考える人が自己を正当化するためによく使う「アマチュアリズム」という言葉がありますね。しかし、本当にいい仕事をするためには「プロ」に徹しないとだめだと思います。プロに徹するということは、やるべきこと、やれることはすべてきちっとやるということです。やれることをやって、そこからなんですよ、オリジナリティーやインスピレーションが問題になるのは。自分は研究者であり、将来は教育者になるという自覚を持ってきちんと勉強してほしいですね。ただ、僕の演習に出ている学生たちを見るとよく勉強していますから、それほど心配しなくていいのかもしれない。

池上：大学院生というのは不安定な身分というか肩身が狭いというのは僕はよくわかっています。精神的にも非常に不安定になることが多いと思うんですけど、先生に相談できなければ、やっぱりその点友達っていうのは有り難いもので、僕は高山君に大変お世話になったりしたんですけども・・・。

高山：いやあ、僕の方こそ池上さんには随分お世話になりました（笑）。

池上：そういう意味で何人か近くに同じようなことをやってたり、同じような境遇の者がいれば、励ましあってやるというかね。まあライヴァルではあるけれども、励ましあってやっていくといいんじゃないですか。それで最終的にダメなら、学問なんて別に人生のうちのそうたいしたことでもないとも言えるわけだから（笑）。それまでは必死でがんばる、という・・・

高山：全く同感ですね。やっぱり一度は全力を尽くさないで。全力を尽くしてダメだったら諦めもつくけれど、全力を尽くさないでいると、まだ本当はできるんだという気持ちだけ持って、ズルズルいってしまう。期間をきめて、その間は全力を尽くす、ということじゃないですかね。

クリオ：本日は長時間にわたりどうもありがとうございました。



略歴・著作

池上俊一（いけがみ・しゅんいち）

1956年愛知県生。1979年東京大学文学部卒業、1983年同大学院西洋史学科博士課程中退。1986～88年フランス国立社会科学高等研究院留学。東京大学文学部助手、横浜国立大学教育学部助教授を経て、1994年より東京大学総合文化研究科助教授（地域文化研究）。

【著作】

- * 『中世の歴史観と歴史記述』【共著】（創文社）1986年〔「十二世紀の歴史叙述と歴史意識」pp.89-107を執筆〕
- * 『動物裁判～西欧中世・正義のコスモス～』（講談社）1990年
- * 『歴史としての身体～ヨーロッパ中世の深層を読む～』（柏書房）1992年
- * 『狼男伝説』（朝日新聞社）1992年
- * 『魔女と聖女～ヨーロッパ中・近世の女たち～』（講談社）1992年
- * 『賭博・暴力・社交～遊びからみる中世ヨーロッパ～』（講談社）1994年

【論文】

- * 「隠修士の精神」『史学雑誌』91編11号（1982年11月）38-82頁
- * 「ラングドックのカタリ派～新たな視点の確立のために～」『史学雑誌』94編2号（1985年2月）71-97頁
- * 「少年十字軍について」『西洋史研究』新輯14号（1985年11月）28-52頁
- * 「女性史のために」『クリオ』創刊号（1986年11月）28-52頁
- * 「ヨーロッパ中世の動物園と動物裁判」『歴史学研究』595号（1989年7月）33-48頁
- * La famille médiévale, vue par les historiens japonais, in: *Médiévales*, 19 (1990), pp.103-107.
- * 「十六世紀フランスの薬」『薬・自然・文化』（昭和薬科大学）2号（1993年）1-15頁
- * 「小林秀雄と現代歴史学」『新潮』90巻5号（1993年5月）106-109頁

【翻訳】

- * 『アナル論文選3 一医と病い』（新評論）【共訳】1984年〔エリザベート・カルパンティエ「黒死病をめぐって」51-96頁を翻訳〕
- * A.ビュルギエール「アンシャン=レジーム期フランスにおけるシャリヴァリ慣行と宗教的抑圧」『思想』740号（1986年2月）205-226頁
- * 『カノッサのマティルダ伝』（岩波書店）【共訳】1986年
- * 【監修】ジャン=ミシェル・サルマン著『魔女狩り』（創元社）1991年

- * ジャック・ルゴフ著『中世の夢』（名古屋大学出版会）1992年
- * [監修] ジョルジュ・タート著『十字軍』（創元社）1993年
- * [監修] ジャン・マリニー著『吸血鬼伝説』（創元社）1994年
- * [監修] ジャン・ド・ニノー著『狼憑きと魔女』（工作舎）1994年

高山博（たかやま・ひろし）

1956年福岡県生。1980年東京大学文学部卒業、1988年同大学院西洋史学博士課程単位取得退学。1984～90年米国エール大学大学院歴史学博士課程在学、1990年同大学院よりPh.D.取得、R. ロペス賞（最優秀中世史博士論文賞）受賞。1989～90年英国ケンブリッジ大学客員研究員、1990～93年一橋大学経済学部助教授を経て、1993年より東京大学文学部助教授（文化交流研究施設）。

【著作】

- * *EXPLORING A MEDIEVAL KINGDOM OF MYSTERY: The Norman Kingdom of Sicily and Its Administration*, 2 vols., Yale University Ph.D. dissertation (New Haven, Conn.) 1990.
- * 『中世地中海世界とシチリア王国』（東京大学出版会）1993年、サントリー学芸賞、地中海学会賞、マルコ・ポーロ賞受賞
- * *The Administration of the Norman Kingdom of Sicily* (Leiden/New York/Köln, E.J.Brill) 1993.
- * 『神秘の中世王国～ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化の十字路』（東京大学出版会）1995年9月刊行予定

【論文】

- * 「十二世紀シチリアにおけるノルマンの財務行政機構」『史学雑誌』92編7号（1983年7月）1-46頁
- * 「十二世紀ノルマン・シチリア王国の行政官僚」『史学雑誌』93編12号（1984年12月）1-46頁
- * *The Financial and Administrative Organization of the Norman Kingdom of Sicily, Viator: Medieval and Renaissance Studies*, vol.XVI(1985), pp.129-157
- * *Familiares Regis and the Royal Inner Council in Twelfth-Century Sicily, English Historical Review*, vol.CIV(1989), pp.357-372
- * *The Great Administrative Officials of the Norman Kingdom of Sicily, Papers of the British School at Rome*, vol.LVIII(1990), pp.317-335
- * 「ノルマン・シチリア王国と歴史研究—ドゥアーナの研究をめぐって」『歴史と地理』435号（1991年11月）、1-16頁
- * *The Aghlabid Governors in Sicily: 827-909, —Islamic Sicily I—, Annals of the Japan Association for Middle East Studies*, vol. VII (1992), pp.427-443

- *The Fatimid and Kalbite Governors in Sicily: 909-1044, -Islamic Sicily II-, *Mediterranean World*, vol.XIII (1992), pp.21-30
- *「フィリップ4世（1285-1314）治世下のフランスの統治構造－バイイとセネシャル」『史学雑誌』101編11号（1992年11月）、1-38頁
- *「中世地中海世界における国家と異文化集団－ノルマン・シチリア王国の場合」『民族と国家の文明史研究』（財）地球産業文化研究所、1994年、7-14頁
- *「シチリア王国」『講座世界史第1巻：世界史とは何か－多元的世界の接触の転機』（歴史学研究会編、東京大学出版会、1995年刊行予定）

司会：千葉敏之、荒木洋育 / 録音：堀越庸一郎